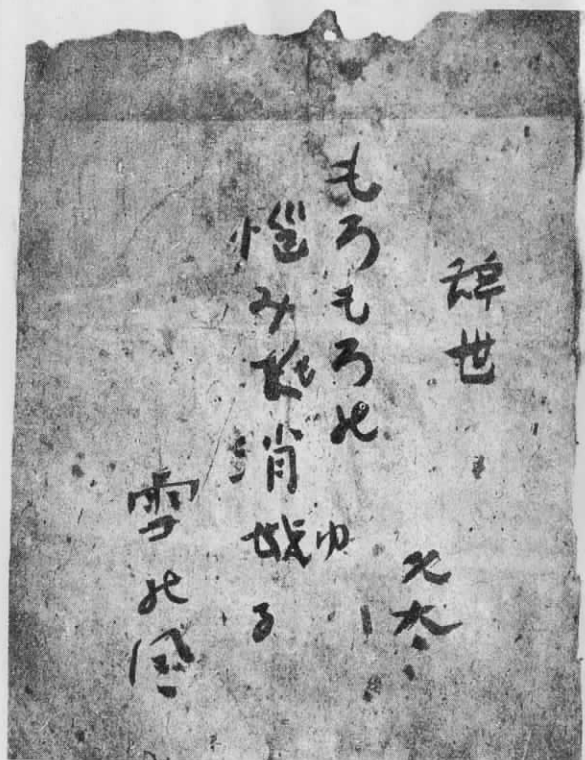


リベルテール

3 月 号



Libertaire Vo, IV, No 3

無政府主義者の機関紙

平九月
三日
五日
四日第三種郵便物認可
四〇号

定価一〇〇円(送料共)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年3月15日発行 Vo, IV No 3

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830 番 三浦精一)

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変わりはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう（三浦）

目次

基地めぐり	萩原道子	1
カレン民族小誌	岩永文夫	2
戦後の思い出	杉藤二郎	4
アナルシーとは何か	121	6
IWW前文		12
書評		13
野火		15

基地めぐり

農民の土にかけたる執念を
まざまざと見き富士の裾野に

忍草の母らは強し権力の前に
命を賭（か）けて土守りをり

再びはまみゆることもかたきからに
泪あふれきぬ握手しつつも

（「母の会」会長と別れの握手して）

裾野をば殺人兵器にけがされて
など怒らざる霊峰富士は

夕映えにあえかにうかぶ北富士を
仰ぎて希（ねが）ふ忍草の勝利を

せまき国土をいやせばめたる暴虐に
怒り燃えきぬ基地めぐりして

〔大泉市民の集いニュースから転載〕

故・萩原道子

東南アジアは人種混交のルツボである。日本に住む我々の考え及ばぬ程である（だが日本ですら朝鮮人、中国人、アイヌ人、ギリヤーク、オロッコと数種の民族が居住していることを忘れてはいけない）たとえばビルマにはビルマ族の他にカレン、モン、チン、カチン、アラカン、シャン、インド系（これにはタミール、ミゾ、ナীগ等を含める）中国人、タイ人さらにタヴアイ、マルグイ等大雑把に挙げてみただけの民族がひしめいている。さらに各民族は支族ともいえるであろうサブトライブに分割される。たとえばモン族はモンダン、モンデ、モンダ、モンニャに細分化されるのである。

私はこの小論でカレン族についてごく簡単に紹介をしよう、他の民族に関しては次の機会に譲る。

カレン族はビルマ、タイ国境周辺を中心にヴェトナムあたりにも多く居住している。その人口は不詳であるがイギリス政府の発表——英領時代のビルマでは一六〇万人といわれ、日本軍占領下の調査で四〇〇万人と発表したがこれは多過ぎる。妥当な所現在ビルマ国内で二〇〇万—二五〇万ぐらいであろう。タイにもほぼ同数居る。

概そ全カレン族で四五〇万内外である。

カレン族は現在国家を持たない民族であるが、ビルマ国内での民族独立運動の中心になって斗っている彼等の由来を私が見聞した限りで記述することも過去、現在を通しての東南アジアへの興味の一助になればと思う。

「なぜカレン族をカレンと呼ぶようになったのか？その語源は？」民族というものを研究しようとする時、まず出会うのがこの間である。ここから初めよう。ビルマ人が自分達と区別して未開民族のことをビルマ語でカユインと云う、これがカレン族の語源であるとする意見があるがこれは正しい説明とは思えない。なぜならカレン族はビルマ族より文化的に勝れているものがあり、他民族間ではカレン文化の高さが評価されている。昔ビルマ族が南下して来た時ビルマに居た先住民族が三種族あった——ビュー、カンヤン、テクである。このうちのカンヤン族が語源であるとする説もあるがビルマ族南下以前にカレン族との接触はあったと考えられる。

すなわちビルマ族の移動以前にカレン族の支族のカレンー族、ブエ・カレン族との交渉があり、ビルマ族は彼

等をそれぞれカヤ、カ・ヨウンと呼んでいた。これが語源であるとする説が一番適当な意見であろう。スゴー・カレン（カレン族の一支族）は自らをブワ・カ・ニヨウまたブエ・カレンはブラ・カ・ヨウンと呼んでいる。ビルマに住むシャン族はヤン、タイに住むシャン族と北部タイ族はユン、南部タイ族はカリアン、雲南の中国人はユンとカレン族を呼んでいる。なお漢字では吉仁族と書く。カヤ、ブラ・カ・ヨウン、ブワ・カ・ニヨウ、カリアン、カユイン、ヤン、ユンは同源であり、カ・ヨウン、カ・ニヨウから発している。試みに発音してみるとその近似に気づく。

ここでカヤ、カ・ヨウン、カ・ニヨウとヤン、ユンとを比較して前者に共通の「カ」という発音について一考しておく。これは漢字で書くと「句」でタイ語系諸語に見られる冠詞的接頭辞ではないかと思う。春秋時代中国の長江下流に句容（江蘇省）句無山（淞江省）句余山（同）句章（現在の淞江省慈谿）などがあり、呉の国を句呉といい、越王に句踐がいた。すなわち長江下流呉、越の地に特徴的に表われているが、長江以南はかつてタイ系民族の原住地であった。また現在広西のトー語（チュアン語の一方言）には「ク」という接辞があつて、クカウ（私）クムン（君）クマ（何）など代名詞、場所詞そ

の他時間に付加される。この様に見るとカレンを表わす名前に付いている「カ」も同様の接辞と見れば前述した各名称がより近似のものになる。ちなみにモン・クメール族と云ってモン族とクメール族（カンボディア人）を同一種族として扱うが、クメールを現地ではカメインと発音しカモーンであつてモンと同語源である。

閑話休題 スゴー・カレンは人をバ・カ・ニヨウ・カレン族をブワ・カ・ニヨウと云うが東南アジアに限らず民族名と人を現わす語とが同一の場合が多々ある。民族学的に興味深い問題である。

ここでカレンの支族について触れておこう。カレンは大きく七支族に分かれそれぞれがさらに細かく一二支族に分類される。

- | | |
|-----------|--------|
| 1. スゴー | モールメイン |
| 2. ブウォー | 〃 |
| 3. ブウエ | トングー |
| 4. パクー | 〃 |
| 5. ケカルクバー | |
| 6. ラフー | カントン |
| 7. ブウエムトウ | ロイコウ |
| 8. カチン | バモ・ヘボン |
| 9. ブレ | トングー |

10. モネイブワ トングー
11. バダウ首長 ロイコウの東
12. " 首短 "

カレンの伝説によるとこれら各支族は昔樂園に共に住んでいたが食糧の不足等の外的要因によって世界の四方へ分散せねばならなくなった。しかしいつの日か彼等が全員昔のように集り自分達の国を造る、その時には神の福音が聞こえ平和がよみがえる。カレン族の独立運動の激しさもこの辺に因があるのかもしれない。

ビルマ及びインドシナ半島に最初に移動してきた民族がカレン族であることはほぼ確実であろう。ビルマ周辺の民族は殆んどが中国から南下してきたのであるが南下の道筋によってサルウィン種、イラクディ種、チンウィン種に別かれるがカレン族はこのうちのサルウィン種で

戦後のおもいで 101

あとがき

こゝまで、古いメモをつなぎ合せ、口述を筆記させて綴ってきたが、長い間の痼疾で、最早体力が限界に來たらしく氣力が衰えたので一応筆を置く。私としては、日

ある。カレン族の民族移動を伝説で調らべると出自はパピロニアである。

パピニアをBC二二三四年に出発し東バキスタンを通ってモンゴリアにBC二一九七年に到着、BC二一〇七年に東トルキスタンに向かつて出発、BC二〇一三年に到着、BC一八六六年にチベットに向かつて出発、BC一八六四年に到着、BC一三八八年雲南に向かつて出発、BC一三八五年到着。雲南からビルマには二次の移動があり第一次はBC一一二八年に出発してBC一一二五年に到着、第二次はBC七四一年に出発してBC七三九年に到着した。遙か四〇〇〇年の昔に一五〇〇年をかけた雄大な民族移動はカレン族の伝説また叙事詩「タリバユア」によって語り伝えられている。

1 続く1

杉 藤 二 郎

本アナキスト連盟史とは関係なく、九州地協活動の一端や、生前よく徹夜で議論をした仲の副島辰己君や、井原末九郎君のことなど、記しておきたいと意図していたの

で、走り書で充分意を尽さないうらみが残る。

ここでまた、自分の半生を省ると、自分が精根をかたむけた、労働組合運動・公害防止運動など、どれも結果的には資本家や権力者の利益に加担したにすぎないことを、思い知らされ、恥入るばかりである。公害防止運動など、市民運動が盛んになればなる程、資本家は手を拱いて国費の出るのを待つことになる。然も国費というのは、言うまでもないが、国民の税金であるという落し話のような、ばからしい話は、現在でも同じだ。人間より産業優先という体制の中では、個々の企業内で、労働者が熱心に組合運動をやっても、革命とははるかに遠いのではないか。

私は地方選挙のあと、二年ばかり寝たり起きたりで養生につとめていたが、昭和四〇年に上京した。その後のことは、東京地協の活動に微力ながら参加したこと、全世界アナキスト大会への大沢君の出席、表社設立の呼かけ参加、笹本君達による「日特金属工業」兵器工場攻撃事件、それに続く裁判、等々思い出は尽きないが、それ等については、いづれ適任者の真実の記録が残されるであらう。

個人的なことを記せば、名古屋での邦創平との出会い、また邦君との縁で、平川君という好漢と親しいつきあい

をするようになり、病弱な老人にとっては、願ってもない同行者に恵まれることになった。平川君は誠実な人柄に加えて、ベテランドライバーで、気軽にどこにでも連れて行ってくれるので、下部の遠藤斌、塩山の小島康彦夫妻、三津浜の山鹿夫人、伊勢崎の大島英三郎、富士市の福田武寿、ふもとの家等々、電車を頼っていは、とても実現しそうなない訪問を、私にさせてくれたのである。これは、東京に住むようになったおかげだが、晩年の山鹿氏に親しく接したこと、塩君の温かな人柄にふれ、勇気づけられたことなど、やはり上京して得られた幸運とよろこぶべきだろう。

旧アナキスト連盟の中にも、行動派と理論派があり、どちらをとるというのではないが、姫路の向井孝君など独自の思想で、若い人々に支持されているとはいえ、私は行動派の先鋒であると思っている。彼は今なお、全力を運動に集中しているが、長年の努力に敬意を表すると共に、その活動が今後も常に停滞することなく、更に新段階が展開するよう、願ってやまない。

この、私的な記録も、三浦君のすゝめがなければ日の目を見なかったかも知れない。長い間、貴重なりベルテールを貰をさいて、支持・激励して戴いた御厚意に感謝すると共に、読者にも心から御礼を申し上げたい。もし

も、私の貧しい履歴が「他山の石」として、いさゝかでも後進の役に立てば、この上のよろこびはない。完

伊串のこと 1 補遺 1

後から二番目の姉鈴子に聞いた話だが、戦時中、伊串は名古屋市内から疎開するために、大八車に母親を乗せて、神領（春日井市神領）の部落内を、どこか部屋を貸してくれる処はないかと、たずね歩いていたそうである。偶々通りすがりにその姿を見た姉が、自分の家の納屋でよかつたら居りなさいと言って連れて帰り、納屋を改造

して住ませたそうである。伊串は、その主婦が僕の姉だということとは知らなかったらしく、九州に来た時は何も言わなかった。後日、名古屋の僕の母の家で名古屋地協を持った時、小川正夫君から伊串の疎開の話が出、それが姉の家であったことを知った。程なく、姉に会う機会があったのでたしかめてみたわけなのである。伊串君も小川君も今は世に亡い人だし、僕としては直接関係もない事だが、伊串の人間としての一面を語る挿話だと思つたので書留めておくことにした。

アナルシーとは何か 1 2 1

マルクス主義者の現実か、それとも
リベルテールのユートピアか

アンリ アガッチオ

『私が個人に認めるただ一つの属性は、独自であること、独創的であること、そしてあまたの状況の中で自由なものの如く、すなわち自我として行動し得ることである』。

ジャン デボー

アナリズムは社会的現象であることができるか。むしろ個人的現象ではないのか。こうした質問に対する答えについては自覚的なすべての行動によらねばならないだろう。普通人である彼としてはこのような不安にわずらはされない。彼は時の流れに身をまかせることを好む

のだが、それでいて歴史における進歩の観念を明白なものと考える。このことが彼を慰め、彼を安心させる。この進歩の観念は効能があるからである。西洋文化は今もなお世界を支配している。問題は効能というよりも歴史の中で生きることなのに、大多数の者には、非常に明白に見えて、進歩と呼ばれる神話にもひとしい観念がいかに展開されたかを、理解しようと思う者にとっては興味深いものである。

×

進歩と歴史

表面的には不動と見えた救世紀の後に、一七八九年に『絶対』王制が倒された時、革命と考えられたこの出来事を正当化しなければならなかった。サン・ジュストから聖マルクスまで、そしてこの近代の煽動家たちに至るまで、すべてこのことに縛りつけられて来た。このようにして『人民』が権力をとって以来、われわれの歴史の概論書は、社会の一つの型から、もう一つの型への、必然的な過程での、継続と進歩があると、教えたむし返している。かくて封建制から王制になって、ブルジョア資本主義に到達し、最後に社会主義者の楽園になる。われわれはさらに良いアナリスト社会を期待して手を伸べるのだ。しかし、王権だったこの『絶対』権力は、実

際のところ一体何だったのか。それはシャブリエ法を制定して労働者の間で一切の結社を禁止した第一共和制よりも圧倒的だったろうか。たとえば絶対主義の象徴であるそうした有名な詔勅にしても、風向でしかなかったではないか（もちろん歴史の風向だ）。産業ブルジョアジーは中世よりも人間的だったろうか。社会主義者の世界は西洋のデモクラシーよりも、もっと公正だろうか。この進化、というよりもこの体制の継続は、その時の経済体制を変化させた新しい技術の獲得に過ぎない。この新しく獲得された経済は時局を合理的に「收拾する」ことができるようになっていた既製の秩序をひっくり返すのである。こうした風化が行われて、集団の凝集力が崩れて当時の道徳的秩序は、社会のいろいろな集団をその間で接合するのに不十分になっていった。このとき、失われた統一を再現し、分割されていたものを再結集することが可能だとしたら、ひとつの新しい権力が確立されるのである。ほぼ理想的安定の性格を呈する構造の型は、もともと古代的な社会である。それぞれの『思想の重要な機会』、それぞれの革命は、原点への復帰によって導かれる。社会主義もこれから逸脱するものではない。この過去への『逃避』の中に、あらゆる宗教、そしてあらゆるユートピアの共通の基盤が見られないだろうか。

再現される統一、そして安定はすべての社会の二つの支柱である。そして、成功した革命の彼方にこうした特性が非常に強められて見出される。論争と非順応主義がその弱々しい声を響かせるためには、新しい崩壊の時期が必要である。安定したものの特性は本質的に進化するものおよび運動するものと対立する。社会は、すべての人間関係の基礎である世俗的慣例と正面衝突する良心的少数者によってしか進化することはできない。

リベラール社会主義は各人の良心の確立を考える。

このことは現実には不可能であり、また多分永久に不可能である。それは高貴だがしかし不毛なユートピアの列に入るべきものである。権力的社会主義はといえば、それは個人を集団に従属させることによって、一時破壊されていた凝集と統一とを、ふたたび集団に取戻すといった手段で、ひとつの未来を持っている。ひとつの強い権力が、それに先行し、頽廃した権力の地位をとり、このとき新来の権力者が自称する正しい正義のために、新しく犠牲を甘受させることができればできるほど、機構は良く動き出すといったように、すべての場合に人間間の諸関係は同じであるということは言うまでもない。

×

歴史の原動力

ある。歴史的唯物論にとっては、カレルが言ったように、人間は「この知られざるもの」なのであり、社会的関係の産物で、それ以外のものではない。したがって人間が著者であるに過ぎず、そしてひとしく人間がその創作者である社会は、その環は閉じられている。人間はこの社会のうちで活動するに過ぎない。この論理、この狂った自尊心は、彼が進歩と呼ぶにふさわしいものである。もはや存在していない意識的人間は代替物を見出さねばならない。これが階級意識である。集団的無意識の反映ではないこの意識は古い世界をひっくり返して、人々間の関係を調和させねばならない手段である。これは欺瞞からのものである。

この歴史の原動力は、だから、一方ではこの集団的無意識によって、他方では発展する生産諸力によって決定される生産関係によってささえられる。したがって物の力によって決定され、人間が忍従する歴史のこの方向、ここに『進歩主義』についての微妙な言いまわしがある。意識をもった人間は、体質的に彼に似たように見える他の者、すなわち市民、人間機械のために消しゴムで消される。

×

歴史における効果

この原動力は、すなわち経済だとわれわれは考えたのだが、大多数の人々は、行動するために、もっと『世俗的』でない刺戟物、宗教あるいはイデオロギーを必要としている。これはいずれも同じもので、この同じものを人々に提供するものである。

現象は、それが大多数の者に利害関係があるときに社会的である。この後者（宗教あるいはイデオロギー）は原動力あるいは煽動者であるというよりも、この現象の産物である。キリスト教とマルクス主義という西洋の二つの乳房は社会的な二つの現象であり、こうした意味で各人の行動を条件づけたし、また条件づける。これらのものは、それら自体が歴史の産物で、ある一定の期間、その期間を通じていろいろに、この統一の必要にこたえる。こうした強力な二つの西洋思想は、個人を集団に統合する恐るべき機構に過ぎない。これらのものは近代社会において、原始社会における氏族の拘束力だったものに相当するのである。

思想と宗教とは人間がつくり上げられた工具のようなもので、工具はますます完全なものになって行くが、その原理においては変りはない。このようにして歴史的唯物論は中世神学の近代的概念であり、死に瀕したキリスト教に交代することのできるものとしてそこにあるので

事物の急激な変革についてのこの信仰は頑強で、人々は何度も幻滅しながらもなおこれを追いかけている。われわれの祖先に、いつでもつきまとっていたこうした失われた楽園の探究にも等しい、やむにやまれぬ要求について、それを疑わないということの問題にしなければならぬ。人間は彼が全体の在り方を知っているというところで、その場合この明白な真実の形式化自体が、正確に彼を全体の外側におくことで、こうした意味で動物から区別される。最初の時から、彼は相容れないものを調和させようとし、空しくも、こうした安心、こうした統一を見出そうと試みている。

この統一の要求はまず宗教の中で具象化すると信じたが、そこには二世紀このかたの運動があり、この統一を実現しようとしたのはこの地上であった。近代国家の憲法は、この統一の支柱であり、実際にはキリスト教とともに始まった。ブルジョアジーのもので追求されたし、社会主義によって完成される。今日では、事は成功している。近代国家はこの楽園の似姿で、あらゆる権力、すべての暴力を資本化しており、多数者の無責任は全面的である。歌う明日の日は今この時のためにある。

人間間の諸関係は、もう本能によって条件づけられてはいないで、意識によって磨き上げられていると想像

することはユートピア的である。ホモサピエンスは遠い過去から、はるかな未来までの諸世紀によって生物学的に決定されており、現時点で社会を一層人道的だと想像することは無駄だと思われる。今日効果的であることを望むことは、歴史の方向に従うことで、したがってマルクス主義者の理論を借りることであり、現在では他に代るべき道はない。社会に対してひとつの衝撃力を持つこと、それはマルクス主義者であることであり、他のすべてのものになることは多分無駄なおしゃべりに過ぎないだろう。

×

ひとつの衝撃力を持たねばならないか。

十九世紀のすべての社会主義諸派のうちで、アナリズムはもっとも鋭敏だった。アナリズムはその思考とその行動の中心に権力を捕えた。われわれの近代帝国の建設者のユートピアは、人々が革命だと信じたことを越えて、問題は生産の諸関係を変化させることでしかないのに、人々の間の諸関係を無くすることができると信じ、また依然として信じていることである。権力は聖職者と王の中に具現した。金銭は権力を充足させるための手段に過ぎない。政治家や技術主義者はそのことを証明するために存在する。アナリズムはアナリズムを

するかは大したことではない。それはわれわれ無しにでも、われわれに反対してでも進むだろう。

アナリズムは物や人々の組織の中に何の見るべきものも持っていない。彼等の貴族身分証はこの歴史の流れの彼方に別であって、かならずしも現代の貧困者を高慢に軽蔑することを含んではいない。人々を指導することとを主張せず、恣意的に革命家に対する反逆者に反対する。この反逆者は、物の秩序を破壊することは望まず、ごくわずかのもので満足する傾向を持つ人々の気楽さを悪とすることを試みる。

アナリストであることは、解決できるよりも、より以上の質問を提出することであり、これは外見を越えて進むために現実の仮像を爆破すること、宇宙の狂った原理に到達させ、われわれの現実の尺度、何という皮肉だ、をあたえる異常に沿って進むことである。

この態度は、あきらめる態度ではない。

アナリストであるということは、また、不正が存在するとき、打ったって、それをあばき、喜んで、喜び以外の何ものでもないように、それと戦かうことである。それはもちろん同時に、権力に反対するとともに明日の秩序の擁護者と同盟することだ。同盟していけないというのではないはずだ。簡単に言えば、集団の利害、個人

偉大なものとして諸原則を否認しないでは、このジレンマから逃れることはできない。権力が無ければ、したがって効能もなく、単なる倫理に帰するに過ぎない。アナリストの存在は少し前からのものに過ぎないにしても、彼には常に懷疑論がつきまといっている。その仲間がいかに少数者であっても、多分彼等は、アナリストは無駄に存在しているのではないということ、このことを信じるだけで充分だということを保証しただろう。

註、この項は何度読んでも文章が明白に汲みとれないために、訳文も分り難いものになっている。以下にもあるかも知れない。原文の著者が分らない文章を書いていいるとは思いたくないから、訳者の実力が不足だとせねばなるまい。機を得て読み直し、訳し直したいと思うが、今は時間に追われているためにこれで御容赦願いたい。(三浦)

×

ではアナリズムとは何か

アナリズムの弱点あるいは偉大さは、一部の者が試みはしたのだが、まさに歴史に密着しないことである。幾つかの態度が、あらゆる煽動政治家たちによって非常によく活用された、この歴史の流れに直面した個人に提供された。それと戦おうとするか、それに執着しようとするか、

の利害に常に従うことだ。そしてもし誰かが、集団なくして個人はあり得ないと、つけ加えた場合は、個人意識のない集団は、週日には蟻のように集って、日曜には鳥のようにかあかあとなく、まとまりのない集団ではないのだと回答する必要がある。

重要なことは、眠ったような大衆に対して、意識をもった個人の独立を守ることである。こうした希望を持つことがいかに少ないにしても、人は、ある関係の産物とだけ言えるものではない。また、自らをいつわらないで眼覚める大衆の前衛となり得るものでもない。人間が偶然ここに存在するとしたら、確実に言える範囲では、自然が彼に、一つの真実な共同集団と呼ばれるにふさわしいものを形成することができる、このたった一つの意識をもった分子であるように、彼に付与したものを、使っていないでいられない存在なのである。(三浦)